

お砂踏み

何世紀ものあいだ、四国遍路はごく限られた人にしか実現できない旅でした。その理由は、四国が離れた地にあることや、旅行にかかる費用、巡礼に必要とされる体力など様々でした。四国の恵みをより多くの人に知ってもらうため、江戸時代（1603～1867年）に、一部の巡礼者たちが聖地から砂を持ち帰り、これを使った「お砂踏み」と呼ばれる巡礼の縮小版を全国各地で始めました。通常は小さな会場で、実際のお遍路の並びで各寺院の本尊を表す絵や彫像を据えて行われました。描かれた本尊を祀った寺院から持ってきた砂の袋が、それぞれの正面に敷かれました。この砂は寺院の聖なる土地を表し、それを踏んだ巡礼者は、実際の聖域に参拝した人と同じ恵みを授かることができました。

お砂踏みは、今日でもその意義を有しています。四国はかつてほど行くのが難しくなく、最近の巡礼者はお寺のあいだを必ずしも歩く必要はありませんが、移動に制限のある人や身体に不調を抱えている人をはじめ、多くの人々にとってお遍路はいまだに実現が難しい旅です。お砂踏みの伝統は、多くの常設された縮小版のお遍路という形式だけでなく、一定期間だけ屋内に設置する持ち運び可能な形式でも受け継がれています。四国に行く方は、善通寺（75番）や大窪寺（88番）など、四国八十八ヶ所の一部でお砂踏みを体験することができます。